

「必ず」の共起条件と意味

張 根 壽

キーワード：副詞、必ず、共起、事態、確率

要 旨

本稿は多様な用法を持つ副詞「必ず」を対象に、その共起条件と基本的意味を記述したものである。従来、「必ず」の共起条件に関しては、述語が状態性か非状態性かという問題の指摘にとどまり、文全体の意味を考える試みはあまりなされてこなかった。しかも、「必ず」は「きっと」との類義性が強調されすぎてきたため、頻度や確率の意味を表す副詞との連続性という問題が等閑視されてきたという問題もある。本稿では、このような問題点を指摘した上で、次の二点を主張する。第一に、「必ず」の共起条件は、従来の述語レベルの分析だけでは不十分であり、「事態」という概念を導入することによって、統一的な記述が可能である。第二に、従来「必ず」の基本的意味は、「確率(習慣・反復)」に求められてきたが、習慣や反復は副詞の意味ではなく、「必ず」が現れた文全体の問題である。「必ず」の基本的意味は、「事態が存在・実現する確率がほぼ100%である」と規定できる。

1. はじめに

本稿は、副詞「必ず」の共起条件を統一的に記述し、「大抵」「大概」「きまって」「いつも」のような副詞との比較分析を通して、「必ず」の持つ基本的意味を記述することを目的とする。

「必ず」に関する先行研究では、主に次の二点が考察の対象になっている。一つ目は共起関係の問題で、二つ目は「必ず」が持つ意味の問題である。まず、共起関係に関しては、形容詞・形容動詞や名詞述語のような状態性のものとは共起せず、「変わり得る余地のある文末と共起する(佐治 1986)」「変化の意味を持つ動詞に係る(小林 1992)」などと指摘されているが、「変わり得る余地のある文末」「変化の意味の持つ動詞」とはどのようなものかという問題は明確にされていない。

次に、「必ず」の意味に関する問題であるが、「必ず」は「きっと」と類義関係にある副詞として、両者が持つ話し手の確信という意味の類似性が強調されてきた。しかし、「きっと」との類義性を比較するだけでは「必ず」が持つ「確率(習慣・反復)^{*1}」の意味が軽視されてしまうという問題がある。

また、「確率(習慣・反復)」という意味は、「大抵」「大概」「きまって」「いつも」などの副詞との連続性が認められるが、これらの副詞がどのような面で類似し、またどのような違いがあるか、という問題についてはそれほど注目されてこなかったと言える。

そこで、本稿では、以下のような構成で「必ず」の共起条件と意味の問題を検討する。第2節では「必ず」の用法と共起関係に関する先行研究を概観する。第3節では、種々の用法に用いられる「必ず」の共起条件を「事態」の概念を導入することで統一的に記述する。第4節では「必ず」の基本的意味を記述し、「確率」と「頻度」の違いについて考える。第5節では、本稿の結論をまとめる。

2. 先行研究

2.1. 「必ず」の用法分類

副詞「必ず」は、以下の(1)～(6)のような多様な用法に用いられる。以下、工藤(1982, 2000)の分類を参考にし、「必ず」の各用法を例示する。

- | | |
|------------------------------------|---------|
| (1) あの人は <u>必ず</u> 来る(はずだ/だろう)。 | [確信] |
| (2) この地域は10月になると <u>必ず</u> 雪が降る。 | [確率] |
| (3) 明日の試合は <u>必ず</u> 勝ってみせる/みせよう。 | [決意・意志] |
| (4) 今度の計画は <u>必ず</u> 成功させなければならない。 | [義務・必要] |
| (5) 今日の5時までに <u>必ず</u> 届けてください。 | [命令] |
| (6) 約束は <u>必ず</u> 守ってもらいたい。 | [希求] |

*1 「必ず」の「確率(習慣・反復)」という用法は、研究者によって用語こそ異なるが、解釈に大きなずれはない。たとえば、工藤(1982, 2000)は「習慣的・反復的な事態の起こる確率」、森本(1994)は「習慣的機能」、呉(1999)は「事態の反復的実現」と説明している。

(1)は、未実現の事態の存在・実現に対する話し手の「確信(推測)」を表す用法で、「必ず」は「きっと」との意味の類似性が見られる。(2)は、一定の条件のもとに成立する事態や普遍的な現象などの「確率」がほぼ 100%であることを表す用法で、「10月になると雪が降る」ことが繰り返して起こる反復の意味が読みとれる。(3)は、動詞の非過去形や意志表示の「ウ/ヨウ」と共起し、話し手の「決意・意志」を表す用法である。(4)の「必ず」は文末の「ナケレバナラナイ」と共起し、事態の実現に対する「義務・必要」の用法に用いられている。(5)(6)は、それぞれ「命令」「希求」を表す表現形式と共起関係にある例である^{*2}。

以上の例からも確認されるように、「必ず」は多様な用法に用いられる副詞である。このような点で、従来の研究では、しばしば「きっと」との比較・考察がなされてきた。しかし、(1)~(6)のうち「きっと」との類義性が認められるのは、主に例(1)の話し手の確信的態度を表す用法で、他には「決意・意志」「確率」の用法がある。それ以外の「義務・必要」「命令」「希求」は、「きっと」の用例ではそれほど生産的ではないと言える^{*3}。

本稿では、「必ず」が持つ種々の用法の中、特に「確率」を中心に議論する。また「必ず」は、「大抵」「大概」「きまって」などの習慣・確率を表す副詞との連続性というものを問題視すべきであることを主張する。

*2 これらの用法のうち、「義務・必要」「命令」「希求」に関しては、工藤も指摘しているように、「必ず」がそれぞれのモダリティに関わっているのか、事態の実現の「確率」に対する「義務・必要」「命令」「希求」なのか、疑わしいものが多い。厳密に言うると、これらの三つに関しては、「必ず」と文末表現の単なる共起関係を示すものであって、「必ず」の用法ではないとも言える。ただし本稿では、「きっと」などの副詞との違いを探るための基準になり得ると考え、「必ず」がこれらの表現形式と共起する場合は、便宜上「義務・必要」「命令」「希求」の用法として分類した。

*3 「きっと」と「必ず」の各用法と使用分布などは、工藤(1982, 2000)、張(2002)を参照されたい。下の表は、張(2002)で調査した「きっと」と「必ず」の各用法の使用分布をまとめたものである。

	確信	確率	決意・意志	義務・必要	命令	希求
きっと(773)	667(86.3%)	42(5.4%)	58(7.5%)		6(0.8%)	
必ず(531)	174(32.8%)	272(51.2%)	47(8.9%)	17(3.2%)	15(2.8%)	6(1.1%)

(用例は『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』のうち、日本人作家の作品から採集した)

2.2. 「必ず」の共起関係

「必ず」の共起関係に関する先行研究を確認すると、まず、佐治(1986)は「必ず」について、「変わり得る余地のある文末と共起する」「変化の意味を含まない状態性のもの、形容詞・形容動詞・可能動詞・名詞述語とは共起しない」と指摘している。しかしその一方で、次のような例を挙げている。

- (7) あの人は必ず英語ができます。
(8) この工事は必ず今月中にできます。(佐治 1986 : p.12)

(7)(8)の述語は「できる」という状態性の述語が用いられている。まず(7)は普通は言わないが、「英語ができるようになる」という変化の意味を感じとったという条件下では言うとし、(8)は状態性の可能でなく、動作性の可能を表しているから問題なく成立すると述べている^{*4}。

次に、小林(1992)も「必ず」の共起制限について触れている。

「必ず」は「変化の意味を持つ動詞に係る」「形容詞や名詞のような状態性の文では言わない」と結論づけているが、文脈によっては正用となる例として、(9)の例を挙げている。

- (9) あのカメラ店はいつ行っても、必ず安い。(小林 1992 : p.5, 下線は張)

(9)の「必ず」は形容詞「安い」と共起しているが、「これは「いつも必ず安く売っている。」という意味であって、繰り返されて安く売られている場合の確率を問題にしているため、正しい文だと言えよう」と述べている。

さらに、呉(1999)では「必ず」の共起条件は、「確信」と「習慣」という用法に応じて異なると説明している。「必ず」が「確信」を表す場合は、「状態性の述語」「否定形(～ない)」とは共起しないが、「習慣」の用法では、次のような実例を挙げ、「状態性の述語」「否定形(～ない)」とも共起できると指摘している。

*4 佐治(1986)の調査では、例(7)(8)の他に「いる」と共起する例も見られる。

(i) あの人は夜は必ず家にいます/いました。(佐治 1986 : p.11)

「必ず」は「夜は」のようなある種の条件句を含んだ文中に現れるとしているが、存在動詞「いる」がどのような変化の意味を持っているかについては触れていない。

- (10) 「一番大笑いしているに違いないね。なにしろ課長補佐というのは義理人情家とみえて、一省の危急存亡を背負ったつもりでよく死んでくれる。大きな汚職事件で自殺する者は、かならず課長補佐クラスだ」

(松本清張「点と線」)

- (11) そんなふうに宣言する日に限って、必ずタコさえもないものなのであった。太郎は絶望感にうちひしがれながら、アラメの林の間を探して歩いた。

(曾野綾子「太郎物語」)

ここで問題になるのは、これらの先行研究で「必ず」と状態性の述語とが共起する例を指摘しているにもかかわらず、「必ず」の共起条件に関しては、「変化性」や「状態性」といった述語レベルの記述にとどまっているということである。

本稿では「必ず」の共起条件を説明するためには、述語のみを対象とした分析では不十分であり、文全体の意味を視野に入れた「事態」という概念を導入する必要があると主張する。つまり、述語が変化の意味を持つか否かではなく、事態の生起の有無が「必ず」の成立の条件であると考ええる。

3. 「必ず」の共起条件

本節では、「必ず」の共起条件の問題について記述する。「必ず」の用法を「確信」「確率」、その他の用法に分け、それぞれの用法における「必ず」の共起条件を「事態」という概念を用いて統一的に記述する。

3.1. 「確信」の場合

まず、「確信」を表す用例を対象に、「必ず」の共起条件の問題について検討する。分析に入る前に、状態性の述語にはどのようなものがあるかということを整理しておく必要があると思う。寺村(1984: pp.81-82)は、「状態を表わす述語というのは、品詞構成から見ると、ふつうは次のような種類のものである」と指摘している。

- a. 名詞+ダ (の類) : 休ミ, 休憩, 休息中 (食事中, など), 病気, スト, ……
- b. 名(詞的)形容詞+ダ (の類) : ヒマ, 元気, 気がかり, 静カ, キレイ, 面倒, ……
- c. 形容詞 : 忙シイ, ネムイ, イタイ, ホシイ, サムイ, ……
- d. 状態を表わす動詞 : アル, イル, (中国語が) デキル, …

「必ず」と共起する述語を観察すると、確かに一部の例を除いては、a～dの状態性の述語とは共起せず、動作・行為を表す動詞のような非状態性の述語と共起する傾向性が強いと言える。しかし、次の(12)～(14)のように「確信」の用法で現れる「必ず」は、存在動詞の「ある」、可能動詞、「名詞+ダ」のような状態性の述語と共起する例も見られる。

- (12) 大蔵省・日銀と金融機関の力関係からみて、本気で金融機関を指導すれば、成果は必ずあるはずだ。地価の抑制は建設・国土両省庁にだけ任せておけることではない。 (『朝日新聞』1986.10.2.社説)
- (13) それだけに、両国はこの騒ぎを一刻も早く克服して、首脳会談へむかって前進すべきであり、それは必ずできるはずだ。(『朝日新聞』1986.9.23.社説)
- (14) こんなに夕焼けがきれいだから、明日は必ずいい天気だ／晴れだ。

(12)は、「必ず」と存在動詞「ある」が共起関係にある例である。普通、「必ず」は「*隣の家の庭に必ず池がある」のような状態の意味の存在動詞とは共起しないが、この場合の「ある」は、「(成果が)上がる」という意味として解釈されるため「必ず」が共起できると考えられる。(13)の「できる」の場合も、前に示されている「克服する」という「ことが可能である」の意味として解釈されるので成立すると言える。さらに(14)の「いい天気だ／晴れだ」も、形態的には「名詞+ダ」の形であるが、「いい天気になる／晴れる」という意味が読みとれるので「必ず」との共起が成り立つ。「*今日は必ずいい天気だ／晴れだ」のように、現在の状態を表す場合は「必ず」は共起できない^{*5}。

(12)～(14)の述語が状態性の述語であるにもかかわらず「必ず」が共起している理由は、状態性や変化性といった述語の意味の問題ではなく、事態が生起するという条件が整っているからであると説明できる。「必ず」の共起現象を説明するためには、文全体の意味を考える試みが必要である。

*5 例(14)の場合は、習慣的・反復的な事態の起こる「確率」の用法に分類することもできると考えられる。しかし「いい天気だ／晴れだ」は、あくまで未実現の事態であり、話者の確信(推測)が働いていることから、「確信」の用法として分類する。このように「確信」か「確率」かという問題には、様々な構文的な条件が加わっていると考えられるが、本稿では用法分類の条件などについてはこれ以上触れない。

3.2. 「確率」の場合

「必ず」が「確率」の用法に用いられる場合は、前節の「確信」に比べ、共起制限がより緩やかであると言える。というのは、「確信」の用法の「必ず」は形容詞や否定形との共起関係にはかなり厳しい制限が見られるが、「確率」の用法では、以下の例のように共起する例も見られるからである*6。

- (15) 「ヨーロッパでは、まず病院には必ず礼拝堂がある。薬で病気をなおす以外に、心をいやさねばならんからな。死ぬ人間には、死ぬ準備をさせなきゃいかん。大学にも礼拝堂のあるところが多い」 (「太郎物語」)
- (16) 激しい運動をした後は、必ず膝が痛い。
- (17) この辺は試合がある時は、必ずうるさい。
- (18) 原文の中に「日本」という言葉が五回使われそれに対応して暗号文の中に、仮に、「KXLL」が五回あらわれる、このことを暗号の方で「反覆」というが、反覆のまま出る暗号は必ず解説が可能である。(「山本五十六」)
- (19) 「あの人は、社交が嫌いなんだ。いつも早く起きて家の中にいる。外出は必要最低限しかしない。うちのおふくろさんみたいに、昼間は必ず家にいないような女は、だめだね」 (「太郎物語」)

(15)～(19)の述語を見ると、(15)は存在動詞、(16)(17)は形容詞で、(18)は「可能である」、さらに(19)は否定形のように、すべて状態性の述語が用いられている。まず、(15)は「～ニ(ハ)～ガアル」という存在構文であり、「ある」も状態的な存在として読みとれるが、「必ず」は自然に共起している。この場合の「必ず」は「病院には礼拝堂がある」という事態が、ヨーロッパではほぼ 100%の確率で存在するということを表しており、結果的に「病院」と「礼拝堂」の複数読みが可能である。「*この病院には必ず礼拝堂がある」のように、「病院」と「礼拝堂」の複数読みができない文脈では「必ず」は共起しない。

ここで、「確率」と「頻度」の違いについて少し触れることにする。

*6 「確率」の用法の「必ず」が状態性の述語と共起する例としては、(15)～(19)の他に、次のように「要る」と共起する例も確認された。

(i) 「年寄り、座敷作ったら、床の間は必ず要るものと決めてかかってるんだから、若い者は対抗出来ないよ」 (阿川弘之「山本五十六」)

(15)の「必ず」は、確率の度合いやニュアンスに多少の違いが生じるものの、「大抵」「大概」「きまって」のような副詞に置き換えることはできる。しかし「いつも」に置き換えることはできない、という点に注目する必要がある。「いつも」のような頻度副詞は、一定の時間軸の中で事態がどれほどの回数で生起するかを限定するものであるが、「必ず」「大抵」「大概」「きまって」のような「確率」を表す副詞類は、必ずしも時間軸の中に生起する事態に限られる必要はない。本稿では、このような違いから「確率」と「頻度」を区別して呼ぶ。「必ず」と「いつも」の違いについては後述する。

次に、(16)(17)は「必ず」と形容詞が共起関係にある例である。「必ず」は、それぞれ「激しい運動をした後は」「試合がある時は」という習慣・反復的意味の条件づけを伴い、「痛い」「うるさい」という事態がほぼ100%の確率で起こるという意味を表している。また(18)の述語も「可能である」という状態的な述語を用いているが、「解説することができる」という意味として解釈されるので「必ず」が共起できる。さらに(19)は、「必ず」が否定形と共起している例である。ただ、この場合の「いない」も、非存在という状態の意味よりは、「昼間は必ず出かける」という意味が読みとれるので許容されると考えられる^{*7}。

以上の(15)～(19)の述語は形態的にはすべて状態性を持つものであり、共起関係にある述語レベルの分析だけでは、「必ず」は状態性の述語とも共起できるという帰結を導いてしまう。これらの例で「必ず」が成立する理由は、状態性や変化性という述語の意味からは説明しきれず、ある種の条件句を含めた「事態」というものを考える必要がある。

*7 「必ず」は(19)のような例を除いては、一般に否定形とはかなり厳しい共起制限が見られる。この点は、類義性が見られる「大抵」「大概」「きまって」「いつも」などの副詞とは少し異なる。以下の例の副詞は否定形と共起関係にある。

- (i) 「初めての時はたいてい効かないものなんだ。数回経験すると血液中にある程度の量のマリファナが融け込んで、やっと効くようになるんだ」

（藤原正彦「若き数学者のアメリカ」）

- (ii) 太郎は日曜日はたいてい／きまって／いつも学校に行かなかった。

上の例の下線部の副詞を「必ず」に置き換えるとやや不自然である。ただ「太郎は車で帰るときは必ずと言いついていいほど酒を飲まなかった」のような場合は、否定を伴うこともできるが、「必ず」と否定形との関係については、現段階では保留とする。

3.3. その他の用法の場合

「必ず」は「確信」「確率」の他に、「決意・意志」「義務・必要」「命令」などの用法にも用いられる。たとえば「必ず 行きます／成し遂げる」のように、動詞の非過去形で話し手の「決意・意志」を表す用法がある。当然、形容詞・形容動詞や「名詞＋ダ」のような状態性の述語がこの用法に用いられることはできない。「ナケレバナラナイ」「～テクダサイ」のような文末表現を伴う「義務・必要」「命令」の場合も同様なことが言える。

「必ず」の共起条件は、これらの用法に限っては一見、状態性という述語レベルでも説明できるように見える。しかし、「義務・必要」の用法の中には、次のような例も確認された。

- (20) しかし、特売はあくまでも一時的な需要喚起にすぎないのだ。これは一種の中毒症状である。ひとつの刺激がおわれれば、つぎの刺激はかならずそれより大きくなければならぬ。 (開高健「パニック・裸の王様」)
- (21) 「太郎にはわからんだろうけど、握り飯というものは、必ずある程度飯の量が無いといかんのだ」 (「太郎物語」)

上の例の「必ず」は、(20)の「大きい」、(21)の「無い」のような形容詞を伴っているが、文全体の意味は、それぞれ「(刺激が)大きい必要がある」「ある程度飯の量が必要だ」という意味として解釈される。

さらに、本稿で調査した資料には見つからなかったが、次の「いる」「必要だ」と共起する例も許容されると思われる。(22)(23)は「義務・必要」の用法で、(24)は「命令」の用法で現れる例である。

- (22) 仕事は必ずその場にいなければならない。
- (23) スポーツには必ず体力がなければならない／必要だ。
- (24) 明日の3時に必ずここにいてください。

以上の(20)～(24)の例からも確認できるように、「必ず」の共起条件は、やはり形態的な述語レベルの分析だけでは説明できないと結論づけることができる。

本稿では、「必ず」の共起条件を事態の生起の有無に求めた。要するに、従来のように述語が変化の意味を持つか否か、あるいは状態性を持つか否かではなく、文全体の意味が「事態」として捉えられるかどうかによって、「必ず」の共起の可能

性が決まると主張する。さらに「事態」という概念を導入することによって、「確信」の場合は非状態性述語とのみ共起し、「確率(習慣)」の場合は状態性述語とも共起するといった用法の区別を行うことなく、「必ず」は「事態が生起する」という条件で成立するという統一的な記述が可能である。

4. 「必ず」の意味:「確率」と「頻度」

本節では、「必ず」の基本的意味を規定し、その意味と種々の用法との関わりについて考える。また、「確率」を表す副詞類を想定するとともに、「確率」の副詞と頻度副詞「いつも」との意味の違いを記述する。

4.1. 「必ず」の意味規定

「必ず」の(基本的)意味や意義特徴に関する先行研究を確認すると、工藤(1982, 2000)は「習慣的・反復的な事態の起こる確率」、小林(1992)は「確率がほぼ100%であるという意味」「くり返して起こる可能性のあることについて言う」、呉(1999)は「事態の反復的表現」と述べている。

つまり、これらの先行研究で「必ず」の意味は「確率(習慣・反復)」に求められている。しかし、「必ず」の意味を「確率(習慣・反復)」に求めた場合、当然「いつも」のような頻度副詞との意味の区別が問題となる^{*8}。

しかも、「必ず」は「確率」だけでなく、「確信」「義務・必要」などの用法を持つが、「確率」という基本的意味とこれらの用法との関係が説明できるのか、という疑問が相変わらず残る。

そこで、本節では「確率」という意味の精密化を図る必要があるという立場から、「必ず」の基本的意味を次のように規定する。

(25) 「必ず」: 事態が存在・実現する確率がほぼ100%である

そして、「確信」「習慣・反復」「決意・意志」「義務・必要」などの種々の用法は「必ず」が持つ基本的意味ではなく、「必ず」が使われた文全体の意味、あるいは

*8 本稿では、個々の頻度副詞については触れない。頻度・反復を表す副詞の意味・分類などは、矢澤(1986, 2000)、仁田(2002)などを参照。

文末形式の影響から生じた二次的なものとする。

ここで、「確率」の意味を表す副詞類について考えてみたい。

前述のように、本稿では「必ず」「大抵」「大概」「きまって」などを「確率」を表す副詞類として考える⁹。次の例を見られたい。

- (26) 「ええ、夏はね、たいていハワイに行くから」 (『太郎物語』)
(27) 行助は、日曜の午後になると、たいていここにきて寝ころび、一時間か二時間をすごした。 (立原正秋「冬の旅」)
(28) 兵隊ごっこ時も、彼はきまって大将におされた。(山本有三「路傍の石」)

(26)～(28)の「たいてい」「たいてい」「きまって」は、習慣的・反復的な事態が起こる「確率」に用いられており、この点で「必ず」との類義関係が認められる。たとえば、(26)の「たいてい」は「夏はハワイに行く」ことの確率が高いという意味を表している。(27)(28)の「たいてい」「きまって」の場合も同様なことが言える。そのうち「たいてい」「たいてい」の場合は、事態が起こる確率がほぼ 100%という条件であれば、「必ず」にも置き換えられる。

また「きまって」の場合は、もっぱら「確率」の用法に用いられるが、「大抵」「大概」は、「大抵の日本人」「大概の事」のような集団に占める割合・概数を表す用法、さらには、次例のように推測の用法にも用いることができる¹⁰。

- (29) 七千人の落第者たちを乗り越えて、(おれは社会の勝者となるのだ) 面接試験を終って最後に合格する者は、たいてい百数十人であるだろう。
(石川達三「青春の蹉跎」)
(30) 彼のことから大概大丈夫だろう。

*9 工藤(2000: p.189)の副詞分類を参考にすると、「習慣・確率」を表すものには「きまって、かならず、きっと」「とにかく、えてして、ややもすれば、ともすると」「いつも、よく」「大抵、大概、普段」などを挙げている。

*10 「大抵」「大概」の用法については、工藤(2000)の記述を参照されたい。また、森田(1988: pp.374-375)では、「大抵」「大概」とも、推量としても用いるが、本来これらの語は“大部分”“おおかた”“あらし”の意味で用いられる」「確率の高さを表す」と記述されている。

「大抵」「大概」が「確率」や「推測」の用法として現れるということは、「必ず」が「確率」や「確信」の用法として現れるという現象と深く関わりを持っていると考えられる。つまり、「必ず」「大抵」「大概」は、確率の度合いという点で連続する関係にあると言える。「必ず」がほぼ 100%の確率の意味を表すのに対して、「大抵」「大概」は「必ず」に比べると、やや低い確率を表す。また、このような確率の度合いの違いによって、未実現の事態の場合は「必ず」が「確信」の用法に、「大抵」「大概」は「推測」の用法に用いられると考えられる。

4.2. 「いつも」との違い

ここでは、「確率」の用法の「必ず」と「いつも」との意味の違いを分析することで、「確率」と「頻度」という概念の違いについて考える。次の(31)～(34)は「必ず」は生起できるが、「いつも」は生起できない例である^{*11}。

- (31) 「先生にききました。生きてる者は必ず死ぬ。会った者は別れるって」
 (三浦綾子「塩狩峠」)
- (32) どこのジムにも必ずある姿見用の大鏡の上を見ると、金子ジム所属のプロボクサーの名札が貼ってあった。
 (沢木耕太郎「一瞬の夏」)
- (33) ビルマは宗教国です。男は若いころにかならず一度は僧侶になって修行します。ですから、われわれくらいの年輩の坊さんがたくさんいました。
 (竹山道雄「ビルマの竖琴」)
- (34) 会社がいかげんな運営をして赤字を出そうが、なにもせず遊んでいようが、資本金には年に八分の配当が必ずつくのであり、将来にわたってこれがつづけられる。
 (星新一「人民は弱し 官吏は強し」)

*11 本稿で調査した資料の中、「必ず」が「確率」の用法に用いられると判断した用例に限る。ただし「確率」の用法として判断した用例の中には、次のような例も見られた。

(i) 「それから薬は一日に四回、六時間おきに必ず忘れずに服ますのです。いいですか、きちんと守らなければ眼がつぶれますよ」
 (渡辺淳一「花埋み」)

上の例は「薬を服む」という事態の「確率」に関わる用法なのか、「薬を忘れず服まなければならない」という意味の「必要・義務」なのかという判断が微妙である。いずれの解釈でも「必ず」を「いつも」に置き換えることはできない。

(31)のような普遍的な現象を表す場合、「必ず」は言えても「いつも」は言えない。その理由として、(31)は「生きてる者は死ぬ」という確率が100%であることを表しているのだから、一定の期間中に繰り返して起こる反復的な事態を表すものではないからと言える。(32)の「必ず」も、「ジムに姿見用の大鏡がある」という事態の確率を表しているのだから、「いつも」は言えないと考えられる。また(32)は、事態が存在する回数を表す意味で、結果的に「ジム」と「姿見用の大鏡」が複数存在するという解釈が成り立つ。この点が「いつも」とは異なり、たとえば「車はいつも駐車場にある」のように、一定の時間軸の中に事態が生起するという意味さえ整えれば、「いつも」は自然に使われる。(33)(34)の場合も、それぞれ「僧侶になって修行する」「八分の配当がつく」という事態が成立する確率がほぼ100%である意味を表している。

(31)～(34)の例で「いつも」が言えないのは、時間軸の中に繰り返して起こるといった時間的な読みができないからであると考えられる。これらの例から「必ず」の意味は、頻度副詞「いつも」が持つ事態の反復性・多回性とはいささか違うものであり、習慣や反復は副詞「必ず」の意味ではなく、むしろ文レベルの意味の問題に帰結すべきであると考えられる。

本稿の議論を整理すると、「必ず」が持つ基本的意味は「確率」であり、「確信」「習慣・反復」「決意・意志」などの用法は「必ず」が持つ意味ではなく、「必ず」が使われた文全体の意味、あるいは文末形式の影響から生じた二次的なものと考えられる。前掲の例をもう一度挙げながら説明すると、

(35) あの人は必ず来る(はずだ/だろう)。 (= (1))

(36) この地域は10月になると必ず雪が降る。 (= (2))

(37) 明日の試合は必ず勝ってみせる/みせよう。 (= (3))

(35)のように、未だ成立していない事態が現れる場合は「確信」の用法を、(36)のように、条件句を含む習慣的・反復的な事態が現れると「確率」の用法を持つ。そして(37)のように、動詞の非過去形や意志表示の「ウ/ヨウ」と共起する場合は「決意・意志」の用法を持つと考えられる。

これらの例の「必ず」に共通する意味はやはり、「事態に対する(高い)確率」であると言える。従来、「必ず」は「きっと」「絶対に」などの副詞と共に話し手の断定的な気持ちや確信的態度というモーダルな側面が強調されてきたが、その基本的意味は「確率」であると帰結できる。

5. まとめ

以上、「必ず」の共起条件と意味の問題を中心に考察を行った。本稿では、従来の研究で「必ず」と「きっと」が話し手の確信という意味の類似性が強調されすぎたことを批判的に捉え、「必ず」の持つ「確率」という意味の精密化を試みた。

本稿の結論は次の二点である。第一に、「必ず」の共起条件は、従来の述語レベルの分析だけでは不十分であり、「事態」という概念を導入することによって統一的に記述できる。第二に、従来「必ず」の基本的意味は、「確率(習慣・反復)」に求められてきたが、習慣や反復は副詞の意味ではなく、「必ず」が使われた文全体の問題である。「必ず」の基本的意味は、「事態が存在・実現する確率がほぼ 100%である」と規定できる。

一方で、本稿では「必ず」の共起条件と意味の問題を中心に考察したため、関連する他の副詞についての詳しい分析はできなかった。たとえば、「大抵」「大概」「きまって」など「確率」の意味を表す副詞類との意味・構文的な違いなどが挙げられるが、詳細については今後の課題としたい。

参考文献

- 呉 珠熙(1999)「「きっと」「かならず」の意味・用法」『筑波応用言語学研究』6号、筑波大学 文芸・言語研究科 応用言語学コース
- 工藤 浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」国立国語研究所『研究報告集3』秀英出版
- 工藤 浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 小林典子(1992)「「必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ」の意味分析」『日本語教育論集』7号、筑波大学留学生センター
- 佐治圭三(1986)「「必ず」の共起の条件—「きっと」「絶対に」「どうしても」との対比において—」『同志社女子大学学術研究年報』4
- 杉村 泰(1997)「副詞「キット」と「カナラズ」のモダリティ階層—タブン/タイトイとの平行性—」『世界の日本語教育』7号
- 張 根壽(2002)「多義性を持つ副詞の意味・用法—「きっと」「必ず」「絶対に」の比較から—」『日本學報』50輯、韓国日本学会
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版

森田良行(1988)『基礎日本語辞典』角川書店

森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

矢澤真人(1986)「反復の連用修飾成分—「動詞句の素性と反復表現の構文論的考察」
試論—」『国語国文論集』15号、学習院女子短期大学国語国文学会

矢澤真人(2000)「副詞的修飾の諸相」『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書店

山田 進(1982)「カナラズ・キット」国広哲弥他編『ことばの意味 3』平凡社

チャン コンス／文芸・言語研究科

(2002年6月27日 受理)